

星の王子さま

情報通信工学科3年 濱野 暁子

『ものは心で見える。肝心なことは目では見えない。』

とても魅力的で深く、それでいて上手く捕らえる事が出来ない不思議な魔力を持った言葉だと感じた。同時にこの言葉の持つ意味を捕らえたいと思った。だから私は、この物語の語り手である「ぼく」になって順に考えてみようと思う。

大人の不聡明さにうんざりして画家になる道を断ったのは「ぼく」が6歳の時だ。そんな彼等のおかげで本当のことを話せる相手に出会わないままずっと一人で生きてきた。6年前のあの日まで。その時、飛行機の故障で「ぼく」は砂漠の真ん中で一人ぼっちだった。そして誰もいないはずの砂漠の真ん中で奇跡は起こった。「ぼく」の一生の友達、王子さまに出会ったのだ。彼は宇宙からやって来たらしい。しかも「羊の絵を描いて」なんて突拍子もない事を言った。大人達のせいで「ぼく」は絵の勉強をしていなかったから、王子さまの納得する羊を描けないし、精神も極限に達して忍耐も限界だ。だから少し意地悪をしようと思ってざっと箱の絵を描いた。「きみの羊はこの中にいるよ」と言うと彼は「こんな羊が欲しかった」と大喜びだった。

これが、ものを心で見える第一歩だ。箱だと思えばそれはただの箱でしかない。しかし、羊がその箱の中に居ると思えば見えなくても羊は確かに存在している。ちょっと考えて紙を透かして見ようとする。しかしそれは、心で見えていないから羊は見えない。考えるのではない、心で見えるのだ。

ところで大人は数を数えるのが好きらしい。大人は数で支配したつもりになる。王子さまの星にも<小惑星B 6 1 2>という名前がついている。なぜだろう？「あの星は他の星と違った色をしているね」とか、「あの星は小さいね」とは言わず「あの惑星は<小惑星B 6 1 2>だ」と言うのだ。それは、王子さまの星を見ているようで見ていないからだと思う。例えば友人の家にピアノがあるとしよう。「このピアノはどんな音色がするの？」と尋ねるだろうか、または、「このピアノはいくらで買ったの？」と尋ねるだろうか。きっと今の私は後者の質問をするだろう。値段でそのピアノの何が分かるだろうか。ピアノが主張したいのは音の方だ。そんな簡単な事を忘れてしまっている。ピアノのことなんて全然見ていない。年齢的にはまだ子供の私でも考え方が大人に近づいている証拠だろうか。だとすれば少し淋しい。

さて、再び「ぼく」の視点に戻る。

どうやら王子さまは、星に咲いた1輪のバラとのいざこざから星を飛び出して来たらしい。可愛がってやればやるほど横暴になる花に嫌気が差してしまったのだ。でも、花にとっても彼にとっても互いが必要な存在だった。後ろ髪を引かれる思い

で彼の旅路は進む。そして地球に辿り着いた。彼はここで咲き乱れるバラと出会って星の1輪のバラの事を思い出して泣いてしまった。そんな時キツネに会って彼の考え方が変わる。自分達は絆で結ばれていると思えるようになる。キツネもバラも世界でたった1匹であり1本の存在であると気付いた。

絆は目に見えないものだ。キツネは王子さまの足音を聞いてワクワクするだろう。小麦の畑を見て金色をした王子さまの髪を思い出して嬉しくなるだろう。絆は日々を鮮やかに彩ってくれる。友達という時は勿論、そうでない時でさえも幸せを運んでくれる。大切なのは友達と過ごした時間だ。大人のように何時間何分何秒と数えるのではなく、友達に喜んでもらえたとか、こんなことをして楽しかったとかそんな些細なことが絆になって幸せにつながっていくと思う。これも目で見ず心で見るものだ。

そろそろあの言葉の意味が分かりそうだが、ついに王子さまとのお別れだ。

「ぼく」はやっと飛行機を直せた。嬉しかったけど王子さまとのお別れの時が近づいていたから辛い気持ちで胸は一杯だった。王子さまも自分の星に帰るのだ。夜空に浮かぶ幾千もの星たちの一つで彼は一本のバラと笑っている。そう思うと「ぼく」にとって星の輝きは特別な意味を持ち始める。彼も自分の星で空を仰げば「ぼく」を隠している地球があると思える。

『ものは心で見える。肝心なことは目では見えない。』

王子さまの肌は白くて金色の髪をしている。それらは、体の特徴でしかない。体は命の源の器でしかないから。その器の奥に隠されているものを探そうとする時、心を必要とするのだ。「ぼく」も王子さまも互いの星を探す時、心で探しては絆に触れて嬉しい気持ちで満たされるだろう。

世界中の人々がものを心で見えるようになれば、思いやる気持ちが芽生えるだろう。そうすれば、戦争をしなくなるだろう。

世界中の人々がものを心で見えるようになれば、動物の悲しみが聞こえるだろう。そうすれば種の絶滅も抑えられるだろう。

世界中の人々がものを心で見えるようになれば、木々の木霊が見えるだろう。そうすれば、自然に触れたくなり、大切に扱うだろう。

しかし、こんなにグローバルに考えなくても、心で見れば何かひとつ、愛おしく思えるものが見つかるはずだ。見つかった瞬間、自分の人生も輝きを放ち始める。そんな前向きな解釈をしてはいけないだろうか。

書名 星の王子さま
著者名 アントワーヌ・ド・サンテグジュペリ
新訳 池澤 夏樹
出版社 集英社文庫